

## 能楽雑感から その6

発声について、荒業、  
モチとコミについて、暗記

### ～ 発声について ～

謡を習い始めて5年くらい経った頃のことです。「安宅」の勸進帳のところでしたが、自分なりに精いっぱい謡ったつもりでいたところ、師匠から、「節はよくお出来になりましたが、少々、やかましいですね」と言われたことがあります。

この批評に、大変、ショックを受けて、しばらくの間、そのことばかり考え続けていたことがあります。

過日、さる同好会で、少し手抜きをして謡ったところ、「今日は、お座敷謡でしたね」と言われてしまったことがあります。

昨日参加した、企業グループの連合謡会でも、お座敷謡が横行していました。この傾向は、年々増幅してきています、残念なことです。

一方、同好会などで、やたらに声が大きくて、やかましく聞こえる謡を耳にすることがままあります。

謡は、声楽の一つであり、オペラのようなものです。（この考え方に異論も多いであろうとは承知の上です）従って、オペラ同様に、暗記するとき以外は、「口ずさむ」ものではなく、ましてや鼻歌のように、軽く謡うものではありません。

誤解の無いように申し添えますが、声量は生来のもので、変えようがありませんから、大声で歌えばよいと言うものでは決してありません。自分なりの声量で、しかし、それを出し惜しみすることなく謡うべきでしょう。

謡の声に、「気」、乃至は「気合」が声に宿っているかどうか問われるのです。「言霊（ことだま）」という言葉がありますが、気の充ちていない謡、気合の入っていない謡に、神は降りてきて下さいません。

### ～ 荒業 ～

今週日曜日 15 日の白謡会では、私自身の喜寿記念として、会設立以来のパートナーであるベテランの友人にお願いして、仕舞・「舍利」（合舞）を舞わせて頂きました。

この曲は、かかとを揃えてつま先を広げ、二回もぐるぐる回る、おそらくは、この曲にしかない極めてユニークな形があると共に、いくつかの荒っぽい卵形があります。

荒業が一番多いのは、神ものですが、その基本形を、集めているのが「嵐山」でしょう。即ち、「嵐山」には、「飛返り」、「飛回り」、「合膝」、などの他、「小回り（男回り）」などがあって、荒業の入門編乃至は教科書とも言えるものです。

一方、舍利は、「跳び返り」もありますが、「一足に飛びあがり立居」、「横に飛び下居」、「抜き足で下がる」、「正へ二足飛び出し下居」、「二足に飛び開き」などの珍しい形が沢山あって、さながら荒業の卒業式の観があります。

これらの技のうち、技術的に難易度が高いのは「飛び開き」で、体力の消耗度が高いのは「抜き足で下がる」（通常、左から4足）であろうと思います。舍利にはありませんでしたが、「飛びあがり安座」も難易度の高いものです。

こうした荒業を成功させるには、何と言っても「気力」が必要で、恐る恐るやっていたり、いい加減にやったら、必ず失敗します。

もう一つ、「飛び返り」のように、身体の回転を伴う技の場合は軸足をきちんと位置決めすることでしょうか。

演じた「舍利」では、最後の「飛び返り」でずっこけました。後で考えてみると、気力に悴るところがありました。

## ～ モチとコミについて ～

他人様の謡を、とやかく言うべき資格も技量も持ち合わせている訳ではありませんが、長年、謡をやっていると耳だけは肥えてくるので、書いておきたくなかったのがコミのことです。

「コミ」とは、能楽、特にその中の打楽器の演奏における「間」を意味していますが、広く、謡も含めての能楽における、音楽的な要素としての「間あい」であろうと理解しています。

コミと似たような概念に「モチ」がありますが、これは、「コミ」とは似て非なる概念で、モチは、16拍子の一つを空ける、デジタル的な「間」です。

16 コマある原稿用紙に対して、12 の文字を当てはめると、どうしても字の入らないコマが出来ますが、これが「モチ」であって、素謡のときはそれを無視しますが、器楽に合わせて謡う（所謂ツツケ謡）ときには、「モチ」の部分を引っぱって謡うことになります。

屋島のキリを例に挙げれば、次の"<"の部分が「モチ」になります。即ち、そくのふなくいくさくいまは・・

これに対して、コミは原稿用紙のマス目とは関係ない、融通無碍の、アナログ的な「間」を意味しています。

故に、習得即ち理詰めで学ぶのではなく、感覚的に自分のものにすることが肝要かと思えますし、そのためには、自分がこれだと思う能楽師が謡っているときの「コミ」を、頭脳ではなく皮膚感覚で体得したら良いのではないかと思っています。（続く）

## ～ モチとコミについて (2) ～

声量もある、節も間違えない、だけど何となく謡に面白味がない、感動を覚えない、という場面に出会うことが、間々あります。

何か変だなと思いながら、その理由に思い至らない場面に遭遇したことが沢山ありましたが、今にして分かったことは、それは謡が整い過ぎていて、「コミ」が入っていなかったことに一番大きな原因があるように思われます。

「高砂」を例にとってみます。

最も分かりやすい「コミ」は、拍子不合のサシとか一声のときです。「我見ても x 久しくなり

ぬX住吉の～」では、Xの箇所「コミ」が入らなければならず、又、xの箇所ではほんの僅かではありますが「コミ」を入れた方が良いと私は思っています。

一方、拍子合いの謡の中にも「コミ」があります。特に、ロンギについては、十分意識しなくてはなりません。

例えば、「げにさまさまのX舞姫の 声もx澄むなりX住吉の～」のところのXの箇所などを例に挙げることが出来ます。

一番誤解されているのは、詞（ことば）には、「コミ」がないと思われているか、又は意識されていないことでしょう。しかし、息継ぎをしなくてもよいところでも、「コミ」を付けた方がよいところが沢山あります。

「高砂」の例では、クリの直前のワキの詞です。即ち「なほなほ高砂の松のめでたき謂はれX詳しく・・・」の、Xの部分は、たとえ上の句を息継ぎなしで謡えるとしても、間を置かなくてはならないだろうと思うのです。

## ～ 暗記 ～

50年以上も謡・仕舞と付き合ってきた私ですが、これまで、ご縁のなかった仕舞もいくつかあって、その中には、なかなか捨てがたい曲もあるため、今年もその中から、二曲を選んで自分のものにしようと決意しました。

言うまでもなく、仕舞を習得するには、その謡を完全に覚えてしまうことが前提になります。しかし、悲しいかな、これが結構難しい仕事になってきています。かつては、短時日のうちに暗記出来て、それを記憶に留めておくことが出来たのに、近年は、覚えるのに手間取り、覚えたものを忘れるのが早くなってしまいます。

これまで、暗記すべき謡はコピーを録って、歩きながら、又は電車の中で、反復唱えながら覚えるようにしていますが、最近、もう一つの方法を会友の方から教わりました。覚えなくてはならない謡を、大きな字で紙に書いて、家のよく見える場所に貼っておくのだそうです。早速、これを実践してみました。

謡のコピーを、常時、身に着けていることも効果的ですが、雑事に追われ、雑念に犯されると、そのような紙切れの存在を忘れてしまいます。その点、家の中に張り付けておけば、「あゝ、そうだった、これを覚えなくちゃね」と常に思い起こせることになります。

取り敢えず、今年の課題としている仕舞の一つである「船橋」の地謡を、毛筆書きにし、そのコピーも撮って、トイレとベッドサイドに展示しました。まだ、その結果は出ていませんが、少なくとも私に覚えるべきことを思い出させる脅迫効果は発揮しています。

## ～ コミについて (3) ～

前回述べたように、「コミ」は、息継ぎの場所ではありません。多くの「モチ」の箇所では、息継ぎをしたくなり、事実「コミ」のところ息継ぎをすることがありますが、所謂「息継ぎ」と「コミ」とは本質的に意味合いが異なるものと思います。

何故ならば、本来、「息継ぎ」は肉体的な苦痛を和らげ、安らぎを求めての行為なのですが、「コミ」は、次に予定されている行為（音声的発声）への準備行為、もっと正確に言うならば、謡の発声には気合がなくてはならない要素ですが、この気合の蓄積のタイミングのようなものです。

故に、「コミ」のところで息継ぎをしても、そこで緊張を緩めてはなりません。このことは、オペラなど声楽に共通したことでしょう。

大袈裟な喩えですが、「モチ」とは、剣道の掛け声を、無声にしたようなもので、次の行動に移る前に心身を奮い立たせるものですから。或いはまた、陸上競技に例えると、リレー競争におけるバトンタッチの心得でありましょう。

謡の技法のひとつに「切り切らず」があります。これも、リズムを意図的に緩めながらも、そこではむしろ緊張を強いられるところであるが故に、一種の「コミ」であろうと理解しています。

多分、私は「コミ」を拡大解釈して、牽強附会の嫌いはあるかなと自分でも思っていますが、素謡における、微妙な「間」を的確に表現する言葉に思い当たらなかったので、「コミ」と言う言辞を使ってみたのですが・・